

みやぎの多文化な人 宮城県内で活躍している海外出身者をご紹介します。

## 石巻市にモスクができます



ソド アブドゥル ファッタさん

バングラデシュ人民共和国出身  
石巻市在住 建設会社代表



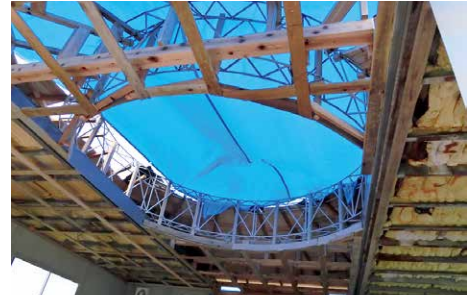
佐々木 スリイさん

インドネシア共和国出身  
石巻市在住 介護職員



リア アプリタさん

インドネシア共和国出身  
石巻市在住 介護職員



建設中のモスクの内部 天井の丸い部分はドーム

—石巻市にモスク(イスラム教の礼拝所)を作ろうと思ったのはどうしてですか。

**ソド** 石巻市とその周辺に住んでいるムスリム(イスラム教徒)のために必要だと思ったからです。私たちは1日に5回お祈りをしますが、その中でも1年に2回、そして毎週金曜日に行われる集団礼拝は特別なもので、モスクでお祈りをします。その時は仙台市青葉区八幡にあるモスク(仙台イスラム文化センター)へ車でいきます。実は石巻市にはムスリムの技能実習生が100人近くいますが、彼らは金曜日の礼拝のため仕事を休み、自費で片道3時間かけて仙台のモスクまで行っています。大変なことだと思いました。モスクもハラールフード(イスラム教において食べることが許されている食品や料理。豚肉やアルコールは許されていない)のレストランも食材店もない石巻地域のこの状況を変えたいとずっと考えていました。

—石巻モスクはいつ完成しますか。これまでどんな準備をしてきましたか。

**ソド** 7月頃に開所する予定です。まずはプレハブベースの建物ですが、アラビア式ドームが目印のモスクです。妻が日本語を学んでいる国際活動団体「国際サークル友好21」の清水孝夫さんに相談し、5年ほど前から計画を立ててきました。清水さんと石巻市役所、石巻の船主や漁業関係者に説明に回ったところ、理解を示してもらい安心しました。開設場所として技能実習生が集まりやすい土地を探し、デザインや施工は、建築会社を営んでいる私が本業の合間に進めてきました。またモスク運営のために国際サークル友好21で出会った同じくムスリムの佐々木スリイさんやリア アプリタさんにも理事になってもらい、一般社団法人石巻イスラム文化センターを設立しました。

—モスク設立について理事のお二人はどう感じていますか。

**リア** ソドさんも私も出身は違いますが、国籍は関係なく同じムスリムとしてつながりを持って、石巻にモスクができることに感謝しています。市内に多くいるインドネシア人の技能実習生は、休みの日にモスクを建てる手伝いに来てくれます。完成をとっても楽しみにしているようです。

**スリイ** 以前は自宅でハラールフードを並べて友人たちと食事を開い

ていましたが、コロナ後はオンラインや電話だけのやり取りになっていました。一緒に食事はできなくても、モスクで会えるのが楽しみです。

—周りの方々からムスリムに対する理解は得られていると思いますか。特に子育てに関する事で、印象に残っていることがあれば教えてください。

**リア** 家族みんなムスリムです。小学生のクラスメイトにハラールフードを理解してもらうのはまだ難しく、「アレルギーがある」と伝えるよう話しています。給食のメニュー表をみて、スマホでレシピを検索して豚肉なしの代替品を作ってお弁当として持たせています。おかげで日本食のレパートリーが増えました。

**スリイ** 子どもはひとりいます。幼稚園の時からお弁当を持たせています。学校にはアレルギーの子もいるので、ハラールフードのお弁当が特別と思われることもなく、周りは特に気にしていないようです。

**ソド** 9.11テロ事件以降、イスラム=テロとつなげて考える人が多くなったためか、誤解されていると感じていました。4人いる子どもたちのひとりが小学校を卒業するとき、クラスメイトから「最初イスラム教は怖いと思ってた。でも、OOちゃんと友達になって違うことがわかった。知らずにいじわるしていたかも。ごめんなさい。」と書かれた手紙をもらい、安心しました。

—モスク開設後の予定を教えてください。

**ソド** 現在のモスクは仮の建物です。いずれ、モスクだけでなくハラールフードの食材店やレストランも併設した4階建ての石巻イスラム文化センターを建てる計画です。地震や津波の時はこの地域の避難場所にもなります。私たち居住者のためだけでなく、観光などで訪れる方々のために役立つ場所にしたいと考えています。

【国際サークル友好21】顧問の清水孝夫さんにお話を聞きました。

国際サークル友好21で外国出身の住民と日々接して、彼らを知れば知るほどモスクの必要性を感じていました。ソドさんに「モスク建設にぜひ取り組みたい」と言われ、これは地域の問題としてとらえるべきだと私も考えていたので、全面的にサポートすると決めました。市への情報提供や市内に26社ある船主やモスク開設地の行政区長へ文書や口頭での説明の結果、理解と協力を得られたことは非常に大きいです。今後の発展に期待していただきたいと思います。

寄付を受け付けているいくつかの支援団体をお知らせします。寄付がどう使われているのかはHP などでご確認ください。

1	駐日ウクライナ大使館への寄付口座 *外務省のサイト内「ウクライナからの避難民に対する支援の提供を検討されている方々へ」 <a href="https://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/c_see/ua/page4_005527.html">https://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/c_see/ua/page4_005527.html</a>	
2	日本YMCA同盟「ウクライナ緊急支援」 <a href="https://srv.asp-bridge.net/ymca/privacy/7">https://srv.asp-bridge.net/ymca/privacy/7</a> 「ウクライナから日本へ 避難者を支援」 <a href="https://www.ymcajapan.org/topics/20220422-2/">https://www.ymcajapan.org/topics/20220422-2/</a>	 
3	日本赤十字社「ウクライナ人道危機救援金」 <a href="https://www.jrc.or.jp/contribute/help/ukraine/">https://www.jrc.or.jp/contribute/help/ukraine/</a>	
4	日本ユニセフ協会「ウクライナ緊急募金」 <a href="https://www.unicef.or.jp/kinkyu/ukraine/">https://www.unicef.or.jp/kinkyu/ukraine/</a>	
5	UNHCR (国連難民高等弁務官事務所) <a href="https://www.japanforunhcr.org/campaign/ukraine">https://www.japanforunhcr.org/campaign/ukraine</a>	
6	UNFPA (国連人口基金) <a href="https://tokyo.unfpa.org/ja/events/71427">https://tokyo.unfpa.org/ja/events/71427</a>	

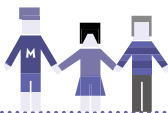
## 「みやぎ外国人相談センター」から

みやぎ外国人相談センターは、MIAの職員のほか、6言語の相談員が相談対応にあたっています。職員やその日勤務している相談員の対応できる言語以外での相談の場合は、外部協力者もしくは多言語コールセンターに3者通話（3人で同時に話すことができる機能）で繋いで、常時日本語を含む13言語の言語で話を聞き、適切なサポートを行うことが可能となっています。お気軽にご相談ください！

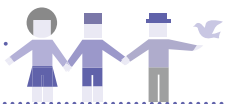
**TEL 022-275-9990** 月曜日～金曜日 9:00～17:00

- 対応言語：中国語、韓国語、英語、タガログ語、ベトナム語、ネパール語、ロシア語、インドネシア語、ポルトガル語、スペイン語、タイ語、ヒンディー語、日本語

※ウクライナ語、ロシア語での対応も外部協力者・多言語コールセンターを活用のうえ、可能となっています。



### シリーズ 外国につながる子どもたちの支援について考える



#### 第1回 宮城教育大学 教授 高橋亜紀子さん

「外国につながる子ども」という言葉を聞いたことがありますか。例えば、両親ともに外国人の家庭の子どももいれば、日本人と外国人夫妻の子ども、外国で生まれた日本人の子どもなど、外国に何らかのつながりがあるという意味でそう呼ばれます。

外国につながる子どもといっても、国籍や母語、宗教、育ってきた環境、来日した年齢、母国の学校に通っていた経験、日本語力など、一人一人バックグラウンドが大きく異なります。最近は、日本で生まれて育った子どもやアジア・中東のイスラム圏の子どもが増えています。

日本で生まれ育った子どもなら日本語も話せるし、何の問題もないと考えがちです。しかし、家庭では親が母語で話すケースが大半です。日本語がペラペラな子どもでも、1年生になる頃に当然知っているような言葉（例えば、まつげ、唇）などを知らない場合があります。そのような子どもたちは学校の教科書を読んでも分からないことが多いのです。

宮城県内ではイスラム教の子どもたちも増えています。宗教上の理由で、学校の給食を食べない、プールに入らない、断食をする子どももいます。みなさんのお子さんのクラスメートにもいるかもしれません。彼らと積極的に接することで、遠い世界の宗教と考えがちだったイスラム教について理解を深めることができます。

外国につながる子どもたちは言葉や文化の壁があり、日本の学校で学ぶことは大変そうに見えます。学校の先生も受け入れや指導に苦労しています。でも、実際学校に行ってみると、日本の子どもたちが手助けしている姿をよく見かけます。身構えてしまっているのは大人のほうかもしれません。日本の子どもにとっても異なる言葉や文化、宗教を持つ子どもと同じ学校で学ぶことは、グローバルな社会で生きていく上で貴重な経験になるのではないのでしょうか。

このコラムでは、外国につながる子どもの支援に関わっている人が支援の様子を少しずつお話していきます。おたのしみに。

## 多文化なトピック

復興支援のつながりから生まれた新しい日本語教室のかたち  
「気仙沼市日本語教室」について

気仙沼市内には2022年3月末現在で537人の外国人が暮らしていて、その半数が技能実習生です。市内には、技能実習生をはじめとした外国人のための日本語教室が複数開設されていますが、そのうち、市主催の「気仙沼市日本語教室」は、県外のNPOと連携するという、他にはない形で運営されています。市役所地域づくり推進課に、開設にいたった経緯や現在の様子をお聞きしました。

技能実習生の受入を仲介する市内の監理団体から要望を受けたこと、また、気仙沼市が「外国人から選ばれるまち」になるために、日本語学習環境の整備が重要であると考えたことから、技能実習生が通いやすい時間帯に、新たに日本語教室を開設することとしました。

運営のあり方について検討していたところ、震災後に市内企業の支援を行っていた住友商事様より、社会貢献の一環として協力したいとの申し出があり、同社が関係する特定非営利活動法人国際社会貢献センター(ABIC)様をご紹介いただき、講師派遣の協力をいただくこととなりました。

開講したのは令和2年7月で、市内に暮らす、または市内企業に勤める外国人であれば誰でも参加できますが、これまでのところ、学習者全員が技能実習生です。

学習者からは「先生が優しいので、参加するのを楽しみにしています」という声が聞こえてきています。受入企業からも「学習した成果が試験合格につながっており、日本語力が向上している」と高い評価を得ています。また、ABICの講師陣は、「学習者は、みな素直で積極的なので、常に明るく活発な授業になっている。気仙沼に来るのが毎回楽しみ」という、嬉しい感想を述べてくれました。講師は東京から毎回来ているのですが、「限られた時間で出来るだけ力になれるよう、個別に宿題を与えるなど工夫して取り組んでいる」とのこと。学習者と講師、両者の高い意欲がよい成果となって表れているようです。

コロナの影響で入国制限があるなか、学習者は増減しながらも一定数おり、今後入国制限がなくなれば増加するものと見込んでいます。市による外国人支援の一つとして今後も継続していきたいと考えています。



気仙沼市日本語教室の様子

## バワニさんの町内会活動記

このコーナーでは、ネパール出身のバワニさんが日本の町内会活動の経験や感想について語ります。

ドウワディ バワニさん ネパール出身。2007年、夫、子ども2人とともに来日。仙台市在住。MIA日本語講座などで日本語を学ぶ。現在、みやぎ外国人相談センター相談員、MIA外国人支援通訳サポーターなどを務め、通訳、翻訳活動を行っている。

## 第1回

## 「班長と幹事と茶話会」

日本に暮らして15年になりますが、昨年度初めて町内会の班長と幹事を務めました。班長は6世帯が順番で担当します。班長がどんなことをするのか分からないので不安でした。町内会の会長さんが、「だいじょうぶですよ、教えますから」と言ってくれたのでやってみることにしました。主な仕事は、市政だよりの配布、回覧板の回覧、会費の集金、それに役員会への出席などです。以前は夏祭りといった行事もありましたが、新型コロナウイルスの関係で、ひとが集まる行事はあまりやらなくなりました。

ある日の役員会で幹事を決めることになりました。引き受けるひとがいなくて、時間ばかりが過ぎました。だんだんその時間がつらくなって、幹事が何をするのかよく分からないまま手を挙げました。幹事のいちばんの仕事は茶話会の準備や運営です。お年寄りなどが集まり、お茶を飲みながら話をします。ひとり暮らしのお年寄りも多く、ふだん話し相手がいらないわけですから、この茶話会はとても貴重です。月に1回では足りないと思いました。私にもみなさんが話しかけてくださるので、たくさんお話をしました。茶話会に参加するようになって、東日本大震災で被災してこちらに引っ越してこられた方などいろいろな方がご近所にいることが分かりました。前よりもご近所さんと親しくあいさつが交わされるようになりました。



